

<学校経営方針の重点>
 1 学習指導の充実
 2 生活指導の充実（小学校）、生活・進路指導の充実（中学校）
 3 情操教育の充実
 4 小中、学園との連携

| 項目 | 経営目標 | 本年度の重点 | 具体的な方策 | 評価 | 分析結果 | 改善策 | 学校関係者評価記入欄 | | 学校の見解と今後の方向性 |
|---------------|------------------------|--|--|----|---|---|------------|--|---|
| | | | | | | | 評価 | コメント | |
| 1 確かな学力 | 確かな学力を身に付ける教育活動を推進する | 指導方法や指導形態の工夫・改善などにより基礎的・基本的な学力の定着と伸長を図る | 習熟度別少人数授業（中一英語）やT T（小一国語、算数、理科、体育、中一数学、社会、理科、保健、美術、家庭、2・3年の一部授業）の充実を図り、分からないところを前の単元に戻って復習をし、繰り返し学習する。 | A | A+B 評価 100%で、A評価が 52%である。学習に苦手意識が強い生徒が多い。復習や繰り返し学習をするよう取り組んできた。 | 毎授業の導入時に、前時の振り返りや、必要に応じて既習事項の復習を行い、学力の定着を図る。 | A | 個々のレベルに合わせて、必要に応じた復習への取り組みに力を入れており「わかる授業」を展開している。 | 習得状況に差が大きいので、T2を活用するなど、個々の学習課題に対応し、「できた」「分かった」を実感できる授業を工夫する。T2の配置を拡大できるようにする。 |
| | | | 児童・生徒の考えを引き出し、意見や理由、説明など自分の思いを表現させる。 | B | A+B 評価 95%であるが、A評価は 35%である。校内研究の「しかけづくり」で、発問について意識して取り組んだ。 | 考えが引き出しやすい発問の仕方を工夫するとともに安心して発言できる環境づくりを心がける。 | A | 特色ある授業展開に、学習基礎である課題解決能力、実践力、人間関係形成力での伸長が認められる。 | 教員一人一人が授業を振り返り、発問の仕方を工夫したりしかけづくりを意識したりして、授業力を高めていく。 |
| | | | 学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」を養うため、課題の設定を工夫するとともにICT機器を必要に応じて活用する。 | A | A+B 評価 95%だが、A評価は 52%である。視覚的にわかりやすい提示を意識してICT活用している。 | ICTは手段であり、目的ではないが、有効活用に向けて校内での研修会を実施する。 | A | ICTの活用については、有効活用に向けた研修会への取り組みなど、今後に向けて大いに期待したい。 | 主体的に学習に取り組めるように活用する際のルールや活用方法例などを、全体で共有して活用場を広げていく。 |
| | | | 特別な支援が必要な児童生徒の学校生活支援シートを作成するなど、個に応じたきめ細かな指導を実施する。 | B | A+B 評価が 100%だが、A評価が 29%である。個に応じた指導には課題が残る。 | 記載した学校生活支援シートの情報共有を関係者で確実にし、学力向上に生かせるようにする。 | B | 発達障害等の児童が多いので、学校生活支援シートに基づいた情報共有を綿密に行い、更なる学力向上を期待したい。 | 寮との連携の際は、顔を合わせた話し合いの場を設けたり、学校生活支援シートを用いたりするなど、児童・生徒の支援に活用する。 |
| 2 規範意識と社会性 | 規範意識と社会性をはぐくむ教育活動を推進する | 挨拶・返事・言葉づかい・態度などの基本的な生活習慣の確立を目指す 進路学習を通して、望ましい勤労観・職業観の育成を図る | 「ルールとマナーの覚書」の運用を通して、服装や挨拶など教員が共通実践を図り、生活指導を進める。また、不必要な情報交換をさせない指導を徹底する。 | B | A+B 評価 100%、A評価は 39%だった。十分ではないと考える。教員の理解に差がある。 | 覚書の成果は大きいですが、項目が多いため、全てを指導していく難しさがある。教員同士の連携を強化することで解消していく。 | A | 児童の接触や情報交換などに対する意識が高く、指導の成果が得られている。基本的な生活指導は学園支援の基本であり、認識を強めていきたい。 | 形骸化しないよう、教職員の生活指導上の温度差を緩和する手段として、確認を怠らないことと、校内での在り方の研修を行っていく。 |
| | | | 「ルールとマナーの覚書」を活用し、児童・生徒のセルフチェックを通して、常識や良識を養う。また、授業態度の振り返りも行う。 | B | A+B 評価が 100%、A評価は 15%だった。児童生徒への活用が不十分との認識と考える。 | 柔軟性をもちつつも、長期的な視点での指導も含め、児童・生徒自身がセルフチェックをすることで振り返る機会を確保する。 | B | 児童の特性を理解しつつ、生活指導を通して規範意識を育む上で身に付けられる効果は大きく、生活経験の拡大にもつながる。 | 規範意識が醸成できるよう、教員一人一人が意識を高め、児童・生徒の対応にあたる。指導に温度差が生じないようにする。 |
| | | | 毎日の日記指導や個別指導を通して児童・生徒理解を図り、いじめや他児からの威圧行為のない安定した学校生活となるよう支援する。 | A | A+B 評価が 100%、A評価が 72%と高い評価だが、いじめを疑う言動はゼロと言えない状況はある。 | 個別の面談をこまめに行うなど、一人一人の状況を把握するとともに、いじめ対策委員会を中心に生活指導部が核となり、迅速な問題解決を目指す。 | A | 日常的に児童との個別面談や寮へのフィードバックが丁寧に対応されていることで、いじめや威圧行為の無い生活が実現できている。 | 日記指導・個別指導の場を活用し、学年で共有を図るなど、児童・生徒へ適切な指導を行い、安定した学校生活を目指す。緊張感をもって対応にあたる。 |
| | | | 進路学習を通して将来、児童・生徒が自立した社会生活を送れるようキャリアパスポートを活用し、キャリア教育を進める。 | B | A 評価が 26%と低い結果である。キャリアパスポートの活用で課題が残った。 | キャリアパスポートが、職業調べや職場体験等に生かせるよう、また、将来について考える機会を意図的に作るなど、系統的な指導を工夫する。 | B | 学園と学校が連携し、退園後の生活支援について、相互理解のもとで自立を促し、支えることの効果は大きい。 | キャリアパスポートを活用し、児童・生徒自身が自立した社会生活をイメージできるようにする。将来のことを考える必要性を、様々な場面で伝えていく。 |

| | | | | | | | | | |
|---|---------------------------------|--|---|---|--|--|---|--|---|
| 3 | 豊かな心と体の健康を育む教育を推進する | 道徳授業等の工夫・充実、また総合的な学習の時間(小学校)や自立の時間(中学校)における福祉体験活動・自然体験活動・体育的活動などを通して、豊かな心と体の健康を育む教育を推進する | いのちの日や道徳科の授業、更にSOSの出し方教育を要とし、体験活動を通して生命尊重の教育を推進し、自他の命を大切にすることを育てる。 | B | A+B 評価が 94%だが、A 評価 22%と低い。SOS の出し方、困ったときの相談をすることには課題が残ったと考える。 | 自己中心的な思考の児童・生徒が多いことから、自分も他人も大切にする意識を醸成するよう、学校生活、教育活動全体を通して実践していく。 | A | 児童の状況や傾向、特性に合わせた教材を精査し、年齢相応に学年ごとにテーマを決めて、生命尊重教育に取り組んでいる。 | エールウイークや日常的な指導の中で、声かけを丁寧に行う。道徳授業に限らず、教育活動全体において自己肯定感を高める指導を実践する。 |
| | | | ものづくりやおしゃれ村での栽培活動(中1を除く)・自然体験や福祉体験など小学校・中学校各学年の発達段階に応じた体験活動を計画的に実施する。 | A | A+B 評価が 100%、A 評価 58%だった。福祉担当と協力して計画的に行っているが、人的配置が厳しい状況が続いている。 | おしゃれ村・ものづくりは準備段階が大変であるが、福祉の先生の尽力が大きく、成果を出せている。 | A | 自然と触れ合う中で、児童個々の発達や特性に応じた体験活動が出来ている。福祉担当との更なる連携を通じて、充実を図っていききたい。 | 自然体験等は本校の特色ある活動の1つである。継続して行うことで、自然が自分をつくる一助となっていることを実感させ、児童・生徒の喜びにつなげていく。 |
| | | | 新型コロナウイルス感染症予防対応を軸とした運動会やクラブ活動を推進する。また、教育相談(例えば担任との面談)等を通して、心身の健康の増進を図る。 | A | A+B 評価 100%、A 評価 50%だった。判断が厳しい状況下を乗り越えるための努力の成果と感じている。 | 今後も感染症予防に努めながら、児童・生徒の心身の健康を第一義に考え、運動会やクラブ活動等をおこなう。 | A | 感染症拡大防止に向けた、適切な対策を講じることで、児童の健康と命を守りながら、一体感を持って健全育成に取り組んでいる。 | 今後も感染症対策を講じながら教育活動を推進していく。状況に応じた衛生観念について、学園と協同して指導していく。 |
| 4 | 小・中および学園職員と連携・協力した教育活動を積極的に推進する | 小・中学校および学園職員との児童・生徒の情報交換を密にして、連携・協力した指導を行う | 児童・生徒の問題行動について、日常的に寮と情報交換を行うとともに、学寮会を充実させ、連携・協力した指導の充実を図る。また、児童・生徒の善行や頑張っていることなどを寮と共有し、双方で誉め、自己有用感を高める。 | A | A+B 評価 100%、A 評価 63%だった。寮と情報交換を密に行うことはできている。しかし、お互いに情報共有する内容の認識のずれが出てきているように感じる。 | 善行や頑張っていることに目を向けるように意識していく。お互いに「こんなこと」と思わずに、今後も、寮と情報交換を積極的に行っていく。 | A | 課題を抱える児童の日常的な情報交換や収集、支援方法の共有について、やり取りが出来ている。情報共有の内容については、丁寧な説明と共通認識を押し進めていく。 | 問題行動に注視してしまうが、善行についても寮と共有していく。寮と連携した指導により、自己有用感を高めていく。 |
| | | | 月に一度の「授業公開週間」や日常の授業参観を通して、学園に児童・生徒の実態を把握してもらい、意見や感想を改善に生かす。 | B | A+B 評価が 100%であるが、A 評価 27%である。児童・生徒の様子がどの程度、伝わっているかの検証が難しい。 | 公開週間と日常の差がなくなってきた。公開週間に限らず、学園の先生が気軽に教室に入り、児童・生徒の様子が見られる雰囲気作りに努める。 | B | 授業公開週間に限らず、授業の様子を観察できる雰囲気は作られている。情報の共有については更なる相互理解を強化していく必要がある。 | いつでも学校生活の様子を実際に見ていただき、そこから児童・生徒について共有できる環境づくりに努める。発表する場などを積極的に活用していく。 |
| | | | 児童・生徒について情報交換やケース会議等を実施して、寮と学校が共通理解のもとで指導に当たり、互いに着地点を見出しながら課題解決や児童・生徒の育成を図る。 | A | A+B 評価が 100%、A 評価も 52%だった。学園の先生方の目線と遊離していないことを望む。 | お互いが同じ温度感、同じ方向に向かって指導にあたれるよう、学園の先生方との報連相が円滑に進むようコミュニケーションを大切にしていきたい。 | A | 学校からの情報や指導は、自立支援と課題解決に向けて大変有用である。学校の先生方との報連相を通じて、児童の共通理解を深め円滑な連携と支援を押し進めていきたい。 | 情報共有や支援方針会議等に積極的に参加する。目指す児童・生徒像を共有し、互いに積極的にコミュニケーションをとり、課題解決を図る。 |

補足…学校教職員による「自己評価」の仕方

4段階評価

A：目標達成、B：ある程度達成、C：もう少し、D：できなかった

○4段階評価 A：目標達成、B：ある程度達成、C：もう少し、D：できなかったを基準として、校内で教職員一人一人が学校を評価したものを集計した。
上記の個人評価中のA～Dの割合をもとに次のように学校としての評価をまとめた。
A … 全体に対するA+Bの割合が90%以上かつ全体に対するAの割合が50%以上
B … 全体に対するA+Bの割合が70%以上

C … 全体に対するA+Bの割合が70%未満(全体に対するC+Dの割合が30%超)
D … 全体に対するA+Bの割合が50%未満かつ全体に対するDの割合が20%以上
(全体に対するC+Dの割合が50%超かつ全体に対するDの割合が20%以上)
(ただし、全体に対するA+Bの割合が70%以上であっても、全体に対するDの割合が20%以上の時は、一段階評価を下げてCとする)